

2022年10月2日[日] - 16日[日] 開場時間 午前10時〜午後5時

新宮市文化複合施設「丹鶴ホール」2階ロビー / 入場無料

休館日 10月3日(月)、11日(火) *10月10日(月・祝)は開館

主催 新宮市立図書館・中上健次顕彰委員会

新宮市文化複合施設「丹鶴ホール」オープニングイヤー事業

渋谷典子写真展

没後30年

中上健次



新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、マスクの着用等基本的な感染防止対策を徹底の上、ご来館いただきますようお願いいたします。



中上健次と、熊野と、かなかぬち

渋谷典子

中上健次さんが亡くなって三十年も経ってしまいました。「おまえは何を、やっているんだ!」と言われたことがある。私の写真に向かう姿勢に対して、喝を入れてくれた。それ以来、いつも頭の片隅に、私を見ている中上さんがいる。三十年間、私は何をして来たのだろうか。いまだにラリクラリの私を見て、天国で怒っているに違いない。

私が初めて中上さんを撮影したのは、一九八六年七月。

和歌山県熊野本宮大社旧社地大斎原。

唯一、書き下ろした戯曲「かなかぬち」を、故郷で上演することになり、

私は、雑誌「週刊宝石」の取材カメラマンとして撮影をした。

取材テーマは二本立て。「中上健次」「かなかぬち」「熊野」。

中上さんは、準備の合間を縫って、熊野の自然豊かなところに連れて行ってくれた。

そこで中上さんの撮影をした。シャイなところもある中上さんだが、

熊野の自然の中でのびのびと、自分をさらけ出していた。

三日間公演で、二〇〇〇人が来場した。印象的だったのは

大勢の観客の中に、母上、養父七郎氏、姉上が並んで席に着き、

幕が開くのを待っていたことだ。息子の晴れ舞台。

どんな気持ちで幕が開くのを、待っていたのだろうか。

もうひとつ忘れられないのは、いきなりスード写真を撮らされたこと。

つぼ湯温泉に入っているところを撮影していたら、

いきなり立ち上がり、「撮れ!」と言って、右手を右に乗せ、左手を頭の後ろに当て、

ファッションモデルのようにポーズをとった。慌てる私を見てニヤニヤしている。

私は、すっかり、からかわれてしまった。

印象的な撮影の日々は、色あせることなく、今でも脳裏に浮かぶ。

三十年後、また、写真を通して、

さまざまなシーンの中上さんに会えるのを、私も楽しみにしている。

以前から、中上さんの故郷新宮市のみなさんに、

写真を見ていただきたいと思っていた。

生前の、若くてエネルギッシュな中上健次さんに会いに来てください。



【会場アクセス】
和歌山県新宮市下本町二丁目2番地の1
新宮市文化複合施設「丹鶴ホール」2階ロビー
JR新宮駅から丹鶴ホールまで徒歩10分
(最寄りバス停・丹鶴ホール前)

【お問い合わせ】
tel.0735-22-2284

丹鶴ホール
TANKAKU HALL

中上健次(1946~1992)

小説家。和歌山県新宮市出身。1976年「岬」で芥川賞受賞。その後、紀州熊野を舞台に、複雑な血縁関係、路地、差別などをテーマに数多くの作品を発表。「枯木灘」「風仙花」「十九歳の地図」「奇蹟」等々。中上健次の作品を原作にした映画も多数ある。「軽震」「火まつり」「千年の輪染」等。また、梅原猛、ポプマーレイ、韓国サムルノリのパフォーマー等、国内外の作家、詩人、哲学者、ミュージシャン、写真家と様々な分野の方々と親交を深め、芸術や芸能、民俗学、哲学など多方面に造詣が深い。多くの対談集、エッセイ集も出版されている。46歳という若さで病のために亡くなる。

渋谷典子

山形県酒田市出身。1953年生まれ。東京写真大学(現東京工芸大学)卒。ワークショップ写真学校 東松照明教室、森山大道教室 卒。若者、新宿をテーマに作品を発表している。

◎主な写真展:「若者」「ボクサー」「原宿1980」「新宿G街」「熱き映画屋たち」他 ◎主な仕事: [雑誌] 別冊太陽「中上健次」、アサヒカメラ「若者」、アサヒグラフ「高倉健」、日本カメラ「グランドキャバレー白ばら」他 [映画スチール]「時雨の記」吉永小百合主演、「鉄道員」高倉健主演 他◎著書:「映画の人びと」